

世界でいちばん

鼻をつまんで
お読み下さい

臭い食べ物。
臭い酒。

—小泉武夫「発酵する夜」を読んで—

先々号で、江戸の男たちの豪快な呑みっぷり、ユニークな生きざまを描いた酒豪小説『蟬之記』を紹介したが、その著者、小泉武夫さんが新しい本を出した。

タイトルは、

小泉武夫『発酵する夜』（新潮社）

オビに

喰って、呑んで、

大いに語れば、

この世は極楽！

世界一臭いつまみをならべ、
△狼狽な酒▽談義に花が咲き、
発酵のお勉強もしながら、
上海でビールを鯨飲——
日本一強靱な胃袋の持ち主、
コイズミ先生と、食に貪欲な
ツワモノ9人の豪快愉快な
蘊蓄合戦。

とあるとおり、各界の名士9人を相手にした対談集である。

その顔ぶれと章のタイトルを紹介する

と、

●荒俣宏

地獄の缶詰をあけた夜

●東海林さだお

愉快にじるじる水割り

●椎名誠

上海まるかじりビール紀行

●日高敏隆

見えない世界のリアルな欲望

●立川談志

「うまい」ってえ、なんだい？

●杉浦日向子

野暮なことは言いつこなしで

●村上信夫

日本の舌を育てた男

●高橋昇

人間らしくやりたいナ

●南伸坊

○・ニミクローンの巨大な力

この対談集は、サントリー株式会社から刊行されている季刊誌「サントリークォーター」での連載対談を、新潮社が再編集したのだから、この中の一部を読まれた方があるかも知れない。でも、こうして一冊にまとまってみると、9人それぞれの個性がきわだって、相乗効果とともに、よりおもしろい読み物になっているのだ。

どれほどワクワクするか。

まずは冒頭の荒俣宏「地獄の缶詰をあけた夜」から——。

小泉先生は「食の怪人」とも「食の冒険家」とも呼ばれ、発酵食品、なかでも臭いものをとくに好んで食べることで知られている。

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

めででしたね、催涙性の食べ物というのは、
荒俣 どうやって作るんですか。

小泉 黒山島という漁場から捕って来た
エイを生のままブツ切りにしまして、瓶
の中に入れて密封して一週間置くんです。

そうすると、軟骨の魚なものですから、鮫
と同じでアンモニアがワーツと出てきま
して。それを食べるときに蓋を開けると、
もう周りに中すごいアンモニア臭で、みんな
がバツと散るぐらいです。

荒俣 それはいつ食べるんですか？

小泉 結婚式とかお葬式です。一匹六十
万ウオンだから、八万円ぐらいする高価な
ものなんです。結婚式では、その猛烈に
臭い食べ物がどれだけ出るかによつて、そ
の披露宴の格式が決まる。

荒俣 それは面白い。匂いの量で式の格
が評価されるんですね。参加した人はみ
んな必ず食べなきゃいけないんですか。

小泉 食べなきゃいけないどころか、もう
奪い合つて食べますよ。若い人が特に好き
なんです。今の金大統領も木浦の出身で、
「ホン・オ・フエ」は大好物らしい。

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

小泉先生は、これを酒の肴に一杯やる
のが無上の悦びらしい。それにしても、こ
れが世界で二番目に臭い食べ物だとする
と、では、世界一臭い食べ物とは何か？

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

小泉 二つ目は、開ける前に冷凍庫で冷やしてガス圧を下げる。三つ目は、開ける時には何か要らないものを見に纏え。そして、四つ目が、風下に人がいないことを確かめろ、と(笑)。

荒俣 なにやら本当にすごそうな……。 (中略)

小泉 覚悟はいいですか？では、開けます。

——シユツ——

荒俣 あつ、ガスが出た、来た来た……。うわあーっ、これはすごい。本当にくらくらする。ドリアンの匂い、いや、体臭に近い。

小泉 やばい、僕の上着に汁がたれちゃった。これから新幹線乗るのに、行けないよ、これじゃ(笑)。

荒俣 でも、うまそうですね。ちよつといいだいでいいですか？

小泉 現地では、みんなパンに挟んで食べるんですよ。バイキングの伝統かな。

荒俣 これは、うまい。生熟れ状態ですね。魚のトローツとした感じが堪らない。

小泉 イケルでしょ。

荒俣 ちよつと呼吸を止めて食べると、なおうまい(笑)。これは病みつきになる。

小泉 うまい！だがこれはまだ浅漬けで、まだまだ子供だね。

——**仲居さん登場。あまりの臭さに周りの部屋からクレームが——**

小泉 いやいや、すみません。とりあえず匂いの元を嚴重に袋に入れてしまっておきましょう。荒俣先生、よろしければぜひ

お持ち帰りください。日本では輸入され

ていない貴重な品なので。

荒俣 えっ、そうなんですか。

小泉 理由は二つありまして、食品衛生上、殺菌してないので缶詰じゃないんです。もうひとつは爆発する危険性があるんです。その二つでダメなんですよ。

◆ ◆ ◆
どうですか？みなさんは挑戦する勇氣
◆ ◆ ◆
がありますか。

「シユールストレンミング」のほうはス
ウエーデンまで行くか、スウエーデンの旅
行者に内密に頼むしか、入手する方法は
ないが、「ホン・オ・フエ」のほうなら、赤坂
にある韓国料理店で食べることができ
らしい(残念ながら店名不明)。

小泉 先生は、臭い食べ物ばかりではな
く、臭い酒もまた大好物のようだ。

◆ ◆ ◆
小泉 あと、もう一つ。中国で一番臭いと
思いう酒を持つてきました。満州里とい
所の白酒です。

荒俣 いや、僕はこれ嫌いな匂いじゃな
い。基本的に臭い匂い、好きなんです
な。基本的に臭い匂い、好きなんです
な。

小泉 分析すると、これが一番臭い白酒。
荒俣 うわっ、確かにだんだん激しくなっ
てきました。ちよつと目に染みる。これ
すごいわ、胸いっぱい吸えないです。

小泉 あははっ。これは酪酸の匂いです。
アルコール度数は三八度。

荒俣 でも、強烈だけど反発を感じる匂
いではないです。むしろ惹かれる。

小泉 偉そうなソムリエに「どんな匂い

がするか、言うてみい」と言いたくなりま
すね。

荒俣 「悪魔の匂いだ」とか(笑)。
(中略)

小泉 アフリカのウガンダに「アナルワ」
というものすごい酒がありまして、パ
ナを酪酸発酵させて造るから、もう、も
のすごく強烈な匂い。

荒俣 バナナはトリップすると言っから
小泉 穴を掘って土の中にまだ青いパ
ナを入れて、上で焚火をするんです。そ
れで三日くらい窯止めをすると、糖分が
出て黄色くなる。

荒俣 糖のあるところにアルコール発酵
あり、と。

小泉 黄色くなったバナナを皮ごと丸木
舟に放り込む。これが発酵槽なんです。そ
こに人間が五、六人入って踏み潰す。滑
ものだから、みんなスッテンコロリンのた
うち回って、ふらふらになって。

荒俣 ものすごいシーンですね。
小泉 発酵が始まると強烈な銀杏の匂い
でね。そうしますと、隣の集落まで七キ
ロくらい離れているんですが、その酒を搾
っていると、風向きによって東風の時に
は隣の集落の人たちが集まってくる。誰
も使っても出していないのに何で来た」と
問うと、「アナルワの匂いがしたから飲め
る」と思ってきた。こんなふうな酒の匂
いとお互いの交流をしているんですね。狼
煙といっしょ。

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

酒の話になると、小泉先生の舌はさらに冴える。「医者いらずの酒」という小見出しの章に入って、トークはますます絶好調。

荒俣 発酵食品は、体を治す薬なんですね。

小泉 発酵産物のひとつ、酒もそうです。医者イサナの医の旧字体「醫」という字があるでしよ。「酒」は言うに及ばず酒、「醜」は薬草と箱を意味するんで、薬草を封じ込めるということですね。つまり、医者イサナは酒に薬を混ぜて飲ませ、病気を治すという意味なんです。

荒俣 医者イサナの三点セットですね。酒にメスメシ（＝薬草）を持たせて体に送り込む。

小泉 酒を飲むと顔が赤くなるでしょ。それを見て、アルコールは体の隅々の患部まで運んでいつてくれることを知ったんですよ。

荒俣 酒は、万病を治す薬だったんですね。

小泉 中国の貴州省には昔、「満殿香酒」マンテンシャンチウカウという幻の薬酒がありまして、これがすばらしい芳香なんです。白酒に八十七種類のお香が入っていて、八十種の植物香と七種類の動物香。

荒俣 麝香とか抹香、マンボウなんかから油をとるんですね。

小泉 さすが博物学の世界権威、一つ言ったら百返つてくる（笑）。それがですね、百年前に造るのをやめちゃったんですが、最後の酒が七本だけ残っていたんです。その酒には面白い効能書と杯がついていて、曰く「この酒を付属の杯で朝晩二

回飲み続けければ、五日目には体から香の匂いを発し、十日目には衣服にも匂いが染み込み、風上に立つとあなたの体から出る素晴らしい匂いに誘惑されて風下の人たちが集まってくるだろう」と。

荒俣 だんだん恐ろしくなってきた。

小泉 「十五日目には住んでいる家にも匂い立ち、その匂いは八里四方に及ぶと続く。さらに、二十日目になると、川で水したり手を洗ったりすると、その川の水は香水になる。そして二十五日目には、赤児を抱くと、その赤児は大人になるまで香の匂いが付く。そして三十日目、もう明日から飲む必要はない。なぜならあなたの体からすべての病気が抜けたから」と書いてあるんです。

荒俣 匂いを体の中に入れて邪気を払う、気を治す。まさにアロマセラピーですね。

小泉 そう。もちろん私も飲んでみた。したらどうなっただと思います。先生、翌日トイレに行つてびっくりですよ。小便からお香の匂いがしてきた（笑）。

荒俣 すこいなあ。ちよつとでいいから飲んでみたいね。

小泉 ぼくのところにありますから、差し上げますよ。しかし、これつて、筆筒に樟脳を入れると虫が逃げる、あの発想ですよな。

荒俣 やつぱり薬くすりですよ。芳香は臭いから、悪いものも逃げていくんだ。いやあ、今日は面白い話がたくさん聞けたなあ。

小泉 ついついしゃべりすぎちゃつて。酒

もずいぶんすすんじゃつた。臭いつまみもあつたし、たまらなくうまかつたですね。

◆ ◆ ◆
いやあ、びつくりしたなあ。世界には、こんなに珍しい食べ物やお酒があるんだ。勉強にもなつたが、かなりのショックも受けた。

同時に、小泉先生の博識に改めて驚嘆した次第だ。

このあと、東海林さだお「愉快にじるじる水割り」では、ウイスキーをテーマに、椎名誠「上海まるかじりビール紀行」では、ビールをテーマに、すばらしく面白い酒談義が展開される。

さらに、6人の文化人との対談が続く。どれもこれもすばらしい内容で、ほんとうなら、すべてを紹介したいのだが、とても紙数が足りない。

あとはぜひ「発酵の夜」を手にとつて、ワクワクする気分を味わってください。

(K・Y)



表紙イラスト：南伸坊